

北海道雄武高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 86名

1 取組の特徴

ピア・サポートトレーニングをHRや全校生徒、ボランティア同好会の活動などに取り入れ、校内外におけるサポート活動や小・中学生との交流を通して、より良い環境づくりに取り組んでいる。

2 取組のねらい

幼少期から固定的な友人関係や人間関係に悩み、自尊感情の低い生徒が多く見られることから、ソーシャルスキルトレーニングを行い、自尊感情を高め、生徒同士の理解の深化や良好な人間関係づくりを目指すとともに、不登校や中途退学の未然防止に努める。

<組織図>



3 取組の経過

4月	ピア・サポート研修会 (年間11回実施) 仲間理解とコミュニケーション (2年次) 仲間理解とピア・サポート (1年次) 自己理解と自己分析 (3年次)	8月	効果的なストロークを知る (1年次) ライフプログラミング (3年次)
5月	話の聴き方トレーニング (1年次) インターンシップに向けた問題解決 (2・3年次合同) 「アセス」・「ほっと」の実施 (全年次)	9月	講師による人間関係づくりトレーニング (2年次) 講師によるコミュニケーションスキルアップ (3年次) 人間関係づくり (1年次) 「アセス」・「ほっと」の実施 (全年次)
6月	集団生活と人間関係づくり (宿泊研修) 問題解決方法を知る (1年次) カウンセラーとの個別面談 (2年次) 全校生徒が協力できる体制づくり (3年次)	10月	面接場面と傾聴理解 (3年次) 自己の行動パターン (3年次)
7月	カウンセラーとの面談個別 (1・2年次) 対立の解消方法を知る (1年次) 講師によるアサーショントレーニング (全年次)	11月	アンガーマネージメント (3年次) 講師による対話とリフレーミング (各年次)
		12月	携帯・スマホ問題を考える (全校生徒)
		1月	非言語コミュニケーション (1年次)
		2月	「アセス」・「ほっと」の実施 (1・2年次)

4 取組の内容

(1) 生徒理解に向けた取組 (「アセス」・「ほっと」の実施)

昨年同様に5月・9月・2月に「アセス」「ほっと」を実施し、前年度との比較及び成長の度合いや「要サポート」者の変化や分析をし、生徒個人及びHRの状況などの理解に努め、個別面接に活用した。1年次は「ほっと」の10項目で偏差値50を超え、4因子得点はすべて高くなった。「アセス」においては「生活満足感」が高くなったが「友人サポート」については若干低くなった。

2年生は「ほっと」の4因子得点は、1年次の1回目から2回目では全項目において減少していたが、2年次には全項目において1年次1回目と同水準に回復している傾向が見られる。「アセス」においても回復傾向が見られた。

3年生は「ほっと」13項目において偏差値が49.6～55.9であり、全道平均的に近い数値であった。

4 取組の内容

(2) 年次によるピア・サポートトレーニング（総合的な学習の時間）

「仲間理解」「自己理解」「話の聴き方」「問題解決」「対立の解消」「効果的なストローク」「傾聴理解」などを計画的に1年次7時間、2年次1時間、3年次5時間トレーニングし、ピア・サポートへの理解を深めた。今年度は3年次のピアサポーターが1年次へピア・サポートの授業を行った。

(3) ピア・サポーター養成トレーニング

ピア・サポーター養成トレーニングを月1回放課後に行い、校内での声かけや地域との関わりに生かしている。最終的に校長室で校内ピア・サポーターとして認定している。

(4) 講師による人間関係トレーニング

宿泊研修においてネイパル砂川の講師から1年次生が受けた。

校内では、函館大谷短期大学客員教授の中野氏による人間関係トレーニングを2年次生、自己表現力の向上とコミュニケーションのスキルアップを3年次生、対話とリフレーミングを各年次、アサーショントレーニングを全年次合同で行った。あわせて、講師による1・2年次生を対象とした個別カウンセリングを行った。

(5) インターンシップに向けてのピア・サポート（2・3年次合同）

2年次生のインターンシップに向けて、名刺による自己紹介の仕方や各企業での心得、インターンシップへの疑問などについてグループ討議を行うことによって、インターンシップに向けての心構えができた。また、3年次生はインターンシップの振り返りとして進路実現の心構えに生かすことができた。

(6) 異年齢交流（小・高交流、中・高交流、地域との連携）

1年次生と小学3・4年生との交流、中学生とのサポーター交流、きらめき我が町事業（地域人との花壇造成）など、ピア・サポート活動を通してコミュニケーション能力を高め、協働で作業することの大切さを学ぶとともに自尊感情を高めることができた。

(7) 生徒会主催によるケータイ・スマホ講習

今年度はケータイ・スマホについて全年次合同のグループで考え、問題提起となる掲示物やCMを制作、発表をして、ケータイ・スマホの使用の仕方考えることができた。ここで制作した掲示物やCMを次年度の1年次生に視聴させる。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

今年度、中途退学及び不登校者はいなかった。

イ その他の指標による評価

生徒間のトラブルの減少と早期問題解決ができた。
保健室来室及び相談件数は減少した。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

1年次生は4因子得点の中で「自己統制」「仲間強化」及び「関係維持」が高くなった。
2年次生は「援助要請因子」の得点が低下したが、「仲間強化」「自己統制」は高くなった。
「ほっと」「アセス」から不適応感の軽減やコミュニケーションスキルの向上が分かった。

エ 生徒の変容した姿

上級生と下級生のコミュニケーションをする場面が増加するとともに、3年次生が行事において1年次生をトレーニングする取組が図られた。



2 課題

ア ピア・サポートトレーニングの成果を活用し、さらにコミュニケーションスキルの向上と定着を図る必要がある。

イ アンケートによる「困り感」の早期発見、個別対応によるコミュニケーションスキルのアップと支援の充実を図る必要がある。

3 次年度に向けて

ピア・サポートトレーニングの成果が、教育活動全体で生かせる環境作りを一層推進する。

北海道留辺蘂高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 97名

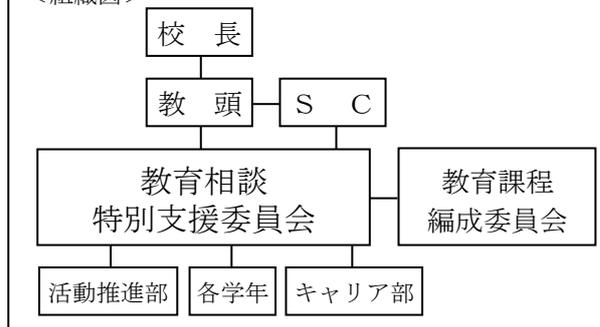
1 取組の特徴

一連の事業6年目の本校は、これまでの実践で身に付けた集団カウンセリングのスキルを活用したグループ活動や異年齢交流を各教科、行事等で積極的に取り組んでいる。「プラスのストローク」「傾聴トレーニング」「仲間理解」「自己理解」などをねらいとしたSGEを1年次では「LHR」や「産業社会と人間」、2年次では「総合的な学習の時間」において計画的に実施している。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーションスキル育成トレーニングツールの蓄積促進及び校内外の研修を通して、全教員がSGE等を実践できる体制づくり及びそのスキルを活用した教科指導を促進する。
- 2 「ほっと」、「アセス」の分析及び効果的な活用について研修を進め、教員のスキルアップを図る。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月・担任による入学式後及びHR開きでの集団カウンセリングの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 宿泊研修における集団カウンセリング ・ 1年生「ほっと」1回目の実施と分析 <p>5月・担任による集団カウンセリング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SCによる個別カウンセリングの開始 ・ 3年生「アセス」1回目の実施と分析 <p>6月・上級学校バス見学会のまとめと発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1年生「アセス」1回目の実施と分析 <p>8月・担任による集団カウンセリング</p> <p>9月・担任による集団カウンセリング</p> | <p>9月・教員研修会（ピアサポート活動と学習）</p> <p>10月・1年生「アセス」2回目の実施と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 担任による集団カウンセリング ・ ようこそ先輩のまとめと発表 <p>11月・担任による集団カウンセリング</p> <p>12月・3年生「アセス」2回目の実施と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 集団カウンセリング研修会へ教員派遣 <p>2月・総合学科研究発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生ステップアップ・プログラムにおける成果の検証と次年度計画作成 ・ 2年生「アセス」1回目の実施と分析 |
|---|---|

4 取組の内容

1 教員主導の集団カウンセリング（1年生：4/8、4/22、5/28、8/18、9/16、11/18）

(1) **ねらい** 人間関係のエクササイズやアサーショントレーニングを実施し、生徒の自己有用感やコミュニケーションスキルを高め、自己変容・自己成長を図る。

(2) **内容** 表現力が弱いため、相手に誤解を与えたり、人間関係のトラブルを引き起こしたりすることが危惧されたので、ロールプレイを行ってより良い受け答え方を考えるトレーニングを実施した。

(3) **成果** 生徒から「より良い受け答えを考えることができた」

「感じ方は一人一人違うことがわかった」「相手のことを考えて聞く姿勢をよくしようと思った」などの感想があり、自己理解・他者理解の深まりが期待できた。



良い受け答えを考え中

4 取組の内容

2 HR担任による集団カウンセリング（1年生：10/7）

- (1)ねらい 社会人講話「ようこそ先輩」を前に傾聴トレーニングを通して聞く態度や心構えを養う。
- (2)内 容 「牛馬ゲーム」でトレーニングの意欲を高めてから、グループに別れて「テーマトーク」に取り組んだ。
- (3)成 果 生徒から「とても楽しく話せた」「話を聞くと相手のことが分かるので、話しをすることは大事だと思った」「目を見てくれると話しやすい」などの感想があり、コミュニケーションスキルの向上とクラスのリレーションを高める効果が期待できた。



グループで「テーマトーク」

3 教員研修会（9/1）

- (1)ねらい 生徒が主体的、能動的に学ぶアクティブラーニングの方法としての協同学習を学ぶ。
- (2)内 容 中野教授を招いて「ピア・サポート活動と学習」について講演をいただいた後、ジグソー法（個人思考→グループ思考→個人思考）を用いて実際に協同学習を行った。
- (3)成 果 生徒が協力しながら課題を解決していく学習形態を体験することができた。異なる経験や知識を持つ他者と関わり合い、交流によって思考が広まることがわかり、今後の学級経営や教科指導に新たな可能性が見えた。



教員研修会

4 各教科での取組

少人数で授業ができる総合学科の特色を生かし、各教科でも積極的にSGEを導入し人間関係づくりを意識して授業を展開している。グループ活動やプレゼンテーション、ディスカッションなど言語活動を主とし、意図的に生徒がコミュニケーションを取ったり助け合いながら授業が進められるよう工夫している。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 不登校生徒数の推移

昨年度から2年連続、不登校生徒がいなかった。

イ その他の指標による評価

- ・1年生の2回目の「アセス」では、「向社会的スキル」に3ポイントの低下が見られた。日頃の様子からも固定化された人間関係にとどまる傾向があったので、異なるグループでのコミュニケーショントレーニングを実施し、徐々に相手への理解が深まった。
- ・3年生の「アセス」では、2クラスとも全項目で「適応度」が標準以上の結果であった。2年生の5月との比較では、ポイントの下がった項目もあったが、両クラスとも「生活満足度」が上がったのは特筆すべき点である。

ウ 生徒の変容した姿

生徒はコミュニケーションの重要性を感じ、生徒会が提案した「Noケータイday」の取組が継続しており、特に昼休みの体育館では学年の枠を越えてスポーツを楽しむ姿が見られた。

2 課題

- ア 中途退学者は昨年と同人数で横ばい状態であることから、1人でも減らせるよう取り組むことが必要である。
- イ 集団でなければ行動できない生徒がいることから、自分で考え、行動できるといった個人の力を身に付けていくことも必要である。
- ウ コミュニケーションスキルを生かす機会としてボランティア活動や部活動を奨励していく必要がある。

3 次年度に向けて

- ア 生徒一人一人の悩みや苦しみに寄り添い、解決の道筋を丁寧に探っていくことで中途退学者を減らしていく。
- イ 人間関係づくりを意識した学級経営や教科指導に引き続き取り組んでいく。

北海道北見工業高等学校

課程： 全日制
 学科： 工業科
 生徒数： 367名

1 取組の特徴

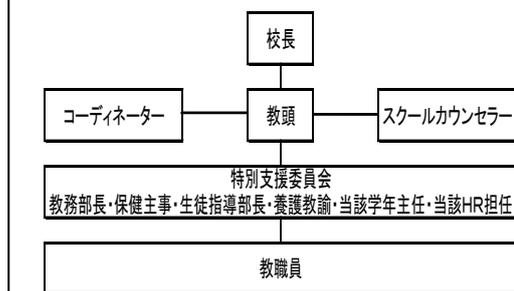
- ・工業科の特色を生かした、学科単位の個に応じた指導体制の整備
- ・就業体験や工場見学の機会を生かした実践的なコミュニケーション能力の育成
- ・「ほっと」を活用したより深い生徒理解と情報の共有

2 取組のねらい

本校の卒業生のうち、約75%が就職しており、企業からも、専門性を持った即戦力として期待されている。そのため、実際の社会生活に生きるコミュニケーション能力を高めることが重要になってきている。

また、本校は例年中途退学者が多く、適切な人間関係の構築によって、中途退学者数を減らすこともねらいとしている。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>4月 携帯電話安全教室</p> <p>6月 コミュニケーション講座
 (1年宿泊研修)
 工場見学(1年宿泊研修)
 工場見学(3年電子機械科)
 生徒意識調査
 ～学校生活に関するアンケート～
 現場体験実習(3年電子機械科)</p> <p>8月 現場体験実習(3年建設科)</p> <p>9月 中学生対象体験見学会</p> | <p>10月 北工フェスティバル
 構造物見学会(1年建設科)
 工場見学(2年見学旅行)</p> <p>11月 就業体験(2年)
 子ども理解支援ツール「ほっと」実施
 及び分析を踏まえた校内研修会</p> <p>12月 北工競技大会</p> <p>1月 課題研究発表会
 進路体験報告会</p> <p>2月 子ども理解支援ツール「ほっと」実施
 及び分析を踏まえた校内研修会</p> |
|--|---|

4 取組の内容

6月 「コミュニケーション講座」

宿泊研修のプログラムの中で、コミュニケーション講座を実施した。

バースデーチェーンを始め、生徒が積極的に参加する様子が見られ、生徒の相互理解を深め、ホームルームや学年における良好な人間関係の構築を図った。



4 取組の内容

9月 「中学生対象体験見学会」

中学3年生を対象に、本校への理解と中学校との連携を強めるために本校の体験学習を行った。

当日は中学校教員や保護者も見学し、本校生徒は中学生に対して、相手に分かりやすい説明や高校生らしい態度を心がけていた。

中学生との作業を通して、自己表現の仕方や人を思いやる気持ちを学ぶことができた。



10月 「北エフェスティバル」

毎年、本校の取組を地域に紹介するとともに、生徒の活躍の場をつくる目的から、市内商業施設にて地域住民へのものづくり体験イベントを通して、各専門学科の代表生徒が日頃の学習活動の成果を発表し地域住民と交流している。

地域の様々な人への対応やイベントの準備や運営を通して、コミュニケーションスキルの向上が図られた。

また、地域住民の反応から、生徒自身が他人から期待され感謝されていることを感じる事ができた。

さらに、生徒同士や教員と生徒のより良い関係づくりにもつながった。



12月 「北工競技大会」

毎年、生徒全体の交流を深めるために、北工競技大会を行っている。すべての生徒が参加し活躍できる場をつくることを第一とし、運動系（アームレスリング、フットサル、ケットボールなど）と文化系（オセロ、将棋、ダーツなど）の競技を実施して、全クラス対抗で競技大会を行った。

各競技の応援もクラスで工夫して行い、生徒同士がお互いを励まし合う雰囲気がつくられた。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 不登校生徒数の推移

不登校生徒数は昨年度2名、今年度は0名である。

イ その他の指標による評価

保健室の利用者は、担任や学年・学科の協力により減少している。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」の活用により、各クラスの傾向と変容の把握が進んだ。継続して実施する。

エ 生徒の変容した姿

- ・1学年は、宿泊研修をきっかけに生徒同士の理解が深まった。
- ・2学年は、就業体験で職場に必要なコミュニケーション能力について学習した。
- ・3学年は、課題研究発表で、大勢の前で課題研究の成果を発表するとともに、コミュニケーションスキルの向上の成果について発表した。

2 課題

ア 本事業の取組内容及び成果をより効果的に発信していく必要がある。

イ スクールカウンセラーによるクラス別集団カウンセリングの充実や、より多くの生徒が効果的にスクールカウンセラーを活用できるよう方策を検討する。

3 次年度に向けて

ア 「ほっと」を活用した実態把握から、活用方法の研修を計画する。

イ コミュニケーションスキルの向上を図る取組の充実と、効果的な方策について検討する。

北海道白糠高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 142名

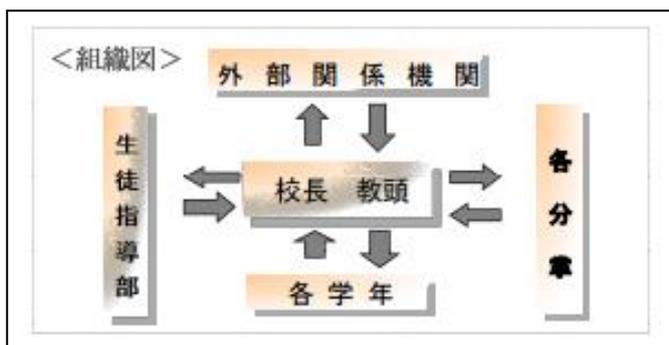
1 取組の特徴

- (1) 教員と生徒、生徒同士の信頼関係を深めるための取組を計画的に実施する。
- (2) 外部機関等と連携し、コミュニケーションスキルを高めるための校内研修を積極的に行う。

2 取組のねらい

本校には学習面や生活面で課題を抱える生徒が入学し、様々な事情から第1学年の途中で進路変更する生徒がいる。

このような課題を踏まえ、本事業を活用し、担任やSCとの個別面談を充実させることで、コミュニケーション力や自己表現力の育成を目指す。



3 取組の経過

- 4月 ・ 早期中学校訪問による生徒情報共有
・ 全校一斉個別面談の実施
- 5月 ・ Q-Uの実施及び分析を踏まえた個別面談の実施
- 6月 ・ SCによるピア・サポートの授業の実施 (第1学年)
・ 「ほっと」に関する校内研修会
・ 赤ちゃんふれあい交流 (第2学年)
- 7月 ・ 学校祭を通してコミュニケーション力を向上させる取組の実施
- 10月 ・ 町内会と合同の避難訓練の実施
- 11月 ・ 「ほっと」の実施 (第1学年)
・ SCによるピア・サポートの授業の実施 (第1学年)
- 12月 ・ 地域住民とのそば打ち交流の実施
・ 体育祭を通してコミュニケーション力を向上させる取組

- 1月 ・ 宿泊研修における集団カウンセリング (グループエンカウンター) の実施 (第1学年)
- 9～11月
・ 「ピア・サポートを学ぼう！」の開催 (3回)
- 4～3月
・ 「サポステの日」を設定 (全16回)
- 5～2月
・ スクールカウンセラーによる個別のカウンセリング及び教員とのカンファレンスの実施
- 8～10月
・ 幼稚園との交流 (第2学年・2回)
- 7～11月
・ 養護学校高等部との交流 (第3学年・3回)

4 取組の内容

1 スクールカウンセラーによる授業 「ピア・サポートについて学ぼう！」 (講師：公立学校スクールカウンセラー 佐々木 啓子 氏)

- (1) 対象 第1学年 (A組、B組) (6月と11月の2回実施)
- (2) ねらい ピア・サポートを通して自分自身を見つめ直すとともに、よりよい人間関係作りについて学ぶ。
- (3) 内容 「カタルタ」や「お絵かきしりとり」等を活用したグループ学習
- (4) 成果 授業後の生徒のアンケートに「友だちと話し合いながらゲームをして楽しかった」「またやりたい」等の感想が多く寄せられた。また、参加した教員からも「有効な活動であり参考になった」との声が上がった。



4 取組の内容

2 スクールカウンセラーによる生徒への個別のカウンセリング&教員とのカンファレンス (北海道教育大学大学院教授 臨床心理士 安川 禎亮 氏)

- (1) 対象 全学年
- (2) ねらい 生徒が自己の抱える問題を明確にし、自己理解を深め、自己肯定感を高める。
- (3) 内容 月2回程度、カウンセリングを希望する生徒(継続カウンセリングの生徒も含む)を対象に、教育相談室で個別のカウンセリングを実施した。
- (4) 成果 カウンセリングを受けた生徒の感想から、スクールカウンセラーに話をじっくり聴いてもらうことで、生徒の自己理解が深まっていったことが窺えた。また、事後のカンファレンスを通して、教員一人一人が生徒理解を深めるとともに自身の指導方法を含め、自己を深く見つめ直すこともできた。

3 「ほっとについて学ぼう！」の研修会の開催

(釧路教育局高等学校教育指導班 沖野 高志 主査)

- (1) 対象 全教職員
- (2) ねらい 「ほっと」を実施するための知識や技能について学ぶ。
- (3) 内容 「ほっと」についての講演(実施方法等)
- (4) 成果 11月に1年生を対象に「ほっと」を実施し、活用することができた。

4 宿泊研修における集団カウンセリング(グループエンカウンター)の実施

- (1) 対象 第1学年
- (2) ねらい グループエンカウンターを通して、生徒の相互理解と仲間づくり、学年としての良好な人間関係の構築を図る。
- (3) 内容 ネイパルあしよろのスタッフによる集団カウンセリング
- (4) 成果 ホームルームや学年への帰属意識が高まるなど、生徒の相互理解や集団づくりに効果があった。



5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

第1学年において、中途退学者数は平成26年に引き続き低い水準である。

- ・ H25年度：17人 → H26年度：8人 → H27年度：10人

(2) その他の指標による評価(自主的にボランティア活動に参加する生徒の増加)

- ・ H25年度：44人 → H26年度：75人 → H27年度：79人

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

第1学年は、5月と2月にQ-Uを実施し、面談等に活用することにより、生徒と教員との深い信頼関係を築くことができた。11月の「ほっと」では全ての項目で全道平均を上回った。

5月に実施したQ-U結果は、学級満足群51.2%、非承認群9.8%、侵害行為認知群24.4%、要支援群0%だった。Q-U結果を分析し、担任、養護教諭及びスクールカウンセラーによる面談、学年団による声かけを継続して行った。また、コミュニケーションスキルを高めるためにスクールカウンセラーによる「ピア・サポート」の授業を各学級2回ずつ実施した。2回目のQ-Uでも要支援群の生徒は0%となり、半数近くの生徒が学級満足群に位置する結果となった。

(4) 生徒の変容した姿

本校には、自己表現や人との関わりを苦手と感じる生徒が多いが、ステップアップ・プログラムの取組を通して、自己表現しようとする意欲が高まり、周囲と上手に関わる力が身に付いてきた。

第1学年では、自己肯定感を高め、コミュニケーション力を培うことを目的とする学習や面談等を繰り返し実施した。第2学年、第3学年では、地域行事への参加、幼稚園や養護学校での交流、赤ちゃんとのふれあい、近隣住民と連携した花壇作業や避難訓練等の学校行事を通して身に付けたコミュニケーションスキルを生かし、積極的に他者と関わりを持つようになる生徒が増加した。

2 課題および次年度へ向けて

- (1) スクールカウンセラーの支援による効果は非常に大きいことから、次年度以降もスクールカウンセラーの派遣を強く希望する。
- (2) 「Q-U」および「ほっと」を効果的に活用するための研修会を継続して行う必要がある。

北海道釧路明輝高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 594名

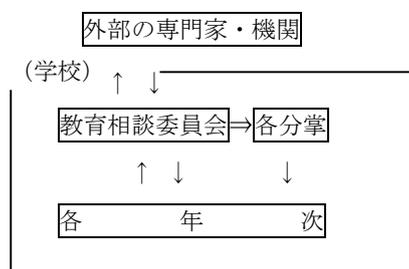
1 取組の特徴

生徒自身が自己理解及び他者理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の向上を図るため、構成的グループエンカウンター (SGE) や集団カウンセリングなど様々なエクササイズを実施する。さらに、個別面談を重視し、各年次で年間複数回実施するとともに、スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実を図る。その際、「Q-Uテスト」や「ほっと」などを活用し、予防的な見地に立って生徒の小さな変化にも目を向けていく。また、生徒間はもとより生徒と教師との良好な人間関係を構築するとともに、学校やクラスに対する帰属意識を高めるため、教員の教育相談に関わるスキルアップを図ることをねらいとした研修会を実施する。

2 取組のねらい

一人一人の生徒を大切にする積極的な生徒指導を推進し、様々な取組を通して生徒にコミュニケーションスキルを身に付けさせることにより、生徒の人間関係づくりのスキルアップや教職員の教育相談に関する指導力の向上を図るとともに、不登校やいじめの未然防止を図る。

<組織図>



3 取組の経過

4～5月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報の収集
- ・宿泊研修におけるリレーションシップトレーニング(1年次)
- ・個別面談による生徒の現状や家庭環境の把握及び学校生活における不安や悩み等の聞き取り(全年次)
- ・生徒情報の共有(教員間)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学习の実施
- ・Q-Uテストの実施(全年次)
- ・Q-Uテストの結果に基づく個人面談(全年次)

7月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・個人面談による学校祭前後における友人関係の変化や不安、悩み等の聞き取り(全年次)
- ・子ども理解支援ツール「ほっと」の実施

8～9月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

10月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学习の実施

11月

- ・Q-Uテストの実施(全年次)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・Q-Uテストの結果に基づく個人面談(全年次)

- ・スクールカウンセラーによる校内研修会

12月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

1～3月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・今年度の事業評価

4 取組の内容

1 個別カウンセリング（スクールカウンセラー 塚本 久仁佳氏・遊佐 賢子氏）

- (1) 日 時 平成 26 年度から随時実施
- (2) ねらい 生徒や保護者の不安や悩み等を解消し、安心して学校生活を送ることができるよう支援する。
- (3) 対 象 希望生徒又は保護者
- (4) 内 容 ア 生徒又は保護者へのカウンセリング及び助言
イ 生徒又は保護者へのカウンセリングの結果に関わる教員への助言
- (5) 成 果 カウンセラーの助言により、生徒理解を深めるとともに、生徒個々に対する教員のカウンセリングのスキルアップを図ることができた。
- (6) 課 題 日常的な生徒との関わり、「ほっと」や「Q-Uテスト」などの結果に基づいてカウンセリング対象生徒を決めているが、より効果的なタイミングで対象生徒のカウンセリングにつなげられるよう、教員間で情報の共有をより密に図る必要がある。

2 集団カウンセリング（外部講師 三島 利紀氏）

- (1) 日 時 平成 28 年 3 月 9 日（水）14:30～16:20
- (2) ねらい 生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため、年次毎に集団カウンセリングを実施し、人間関係づくりを支援する。
- (3) 対 象 1 年次生全員
- (4) 内 容 集団カウンセリング
- (5) 成 果 生徒は集団での実践を通して、自己理解・他者理解・コミュニケーションをとることの大切さと難しさを理解することができた。
- (6) 課 題 単発のエクササイズとなってしまったため、継続的な取組を行い、人間関係づくりを日常的に支援する必要がある。

(7) 生徒の感想より

- ・普段の生活の中で、人と話す際に、思った以上に相手の顔や態度やしぐさに気を遣っていたことに気づいた。
- ・スマートフォン等でのやりとりでは、自分が伝えたいことが相手にはしっかり伝わっていないということが、今回の体験を通して分かりました。実際に会って、表情を見ながら会話をするものの大切さを再認識しました。
- ・普段の何気ない会話でも、笑顔で話したり相手の目を見て話したりすることで、相手に与える印象や雰囲気が大きく変わりました。今まで何となくやっていたことが実は大事なことであったと気づきました。
- ・相手の話を聞くだけの「一方通行」が一番難しかったです。話の内容が分からなくても聞き返せず、話についていけなくなって大変でした。聞いている人が、話している人の目を見たり、あいづちを打ったり、質問したりすることで、話している人も、聞いている人にも上手に話を伝えることができました。

（集団カウンセリングの様子）



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者及び転出者は毎年数人ずついるが、その数は減少傾向にある。該当生徒についても、ホームルーム担任及び養護教諭等が相談を受ける中で、生徒の思いをくみ取ることができており、早期段階から学校の支援体制の中で指導を行うことができています。

イ その他の指標による評価

スクールカウンセラーがほぼ毎月来校し、生徒との個別カウンセリングを実施するとともに、各年次における個別面談の充実により、保健室へ外科・内科的要因を除き相談を目的として来室する生徒は例年並みの人数となっている。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

全体の「要素偏差値」は 50.0 以上あり、大きな変動もなく安定した数値であることから、集団として落ちついているという本校生徒の実態を表していると言える。また、前年度との比較では、全体的に数値が上昇しており、より安定した集団が形成されていると言える。一方、「礼儀」「遵守」「自律」の数値が高く、「拒否」「緊張」「忠告」の値が低いことから、安定した集団を維持することはできるが、自分の意見を主張したり相手を批判したりするなど、正面から相手に向き合うような人間関係を築くまでには至っていない。SNS による人間関係づくりの影響も考えられるが、自己有用感を高め卒業後の進路に耐えうる力を身につけるためにも、もう一歩進んだ人間関係の構築が求められる。

エ 生徒の変容した姿

スクールカウンセラーによるカウンセリングを経た生徒が、「今まで自分が悩んでいたことは悩まなくてもいいことだ」と自分を変えるきっかけを見つけ、それ以後は、友人とコミュニケーションをとる際に、大変楽な気持ちで接することができるようになっていた。ホームルーム担任等と面談を重ねた上で、学校以外の異なる立場の人から異なる言い方でアドバイスをもらうことが自己理解や自己変容につながるきっかけとなる。カウンセリングを受けた生徒の中には、その後の面談等で確認すると、「気持ちが前向きになるきっかけをもらった」と口にする者も多くいた。

2 課題

生徒が悩んでいても気付かないケースやスクールカウンセラーによるカウンセリングにつながらないケースがまだ見受けられることから、生徒の「小さなサイン」を見逃さない教職員の一層の意識改革が求められる。

3 次年度に向けて

- (1) 今年度は、スクールカウンセラーによるカウンセリングを非常に効果的に実施することができたため、生徒の悩みや相談に対応することができた。一方で、相談件数が大きく減少することは考えにくいいため、スクールカウンセラーに頼り過ぎないように、教育相談を組織的に行う必要がある。
- (2) 「Q-Uテスト」及び「ほっと」については、生徒の実態の把握や教育相談等において活用することができたが、より一層効果的な活用を図る必要がある。
- (3) 本事業における取組とキャリア教育等の本校の教育活動との融合を図り、本事業の終了後において、継続的に積極的な生徒指導を推進していく校内体制を構築する必要がある。

北海道釧路東高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 420 名

1 取組の特徴

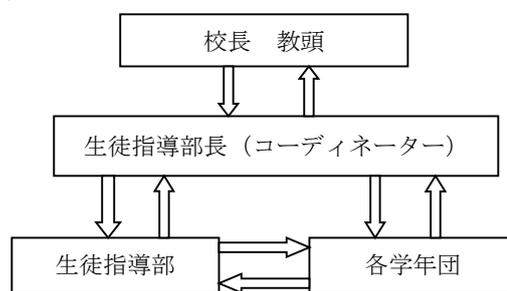
生徒のコミュニケーションスキルの向上を図り、良好な人間関係づくりが行われるよう学校組織体制の充実を図る。グループエンカウンター、ボランティア活動等を通じて生徒全体のコミュニケーションスキルの向上を図るとともに、ピアサポート活動等により、生徒の中にピアサポーターを育成することで対人関係のトラブルの未然防止に努める。

2 取組のねらい

円滑な人間関係を構築できるコミュニケーションスキルや自己表現力を生徒に身に付けさせることで、人間関係のトラブル等の未然防止につなげるとともに、自ら解決できる能力を育成する。

また、多様な生徒に対応するため、生徒への相談活動を充実させる校内体制を構築する。

<組織図>



3 取組の経過

通年 ピアサポート (希望生徒)

4月

- ・ 宿泊研修における構成的グループエンカウンター (第1学年)
- ・ 家庭訪問及び面談週間 (第1・2学年)
- ・ 「ほっと」1回目 (第1学年)

6月

- ・ 校外清掃 (ゴミ拾い) (第1学年)
- ・ ふれあい花壇造成 (第3学年)
- ・ 交通安全宣言集会 (全学年)

8月

- ・ 校外清掃 (ゴミ拾い) (第2学年)

9月

- ・ 思春期保健講座 (第1・2学年)

10月

- ・ 人権教室 (第1学年)
- ・ リーダー研修会 (生徒会執行部)
- ・ ふれあい花壇撤去 (第3学年)

11月

- ・ 高等学校生徒会フォーラム (生徒会執行部)

12月

- ・ Q-Uテスト (第1・2学年)

2月

- ・ 「ほっと」2回目 (第1学年)

3月

- ・ 次年度に向けた分析

4 取組の内容

1 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施

- ・ 第1学年において4月と2月に実施した。
- ・ 4月に実施した「ほっと」においては、全体的に「学業」が低く、学習に不安を抱えていると思われる生徒が多い結果となった。
- ・ 2月に実施した「ほっと」においては、生徒のコミュニケーション能力の向上が見られた。

4 取組の内容

2 宿泊研修におけるコミュニケーションスキル向上のための取組

- (1) **ねらい** 入学直後の宿泊研修において、人間関係構築のための取組を実施することで、その後の人間関係のトラブルの未然防止につなげる。
- (2) **対象** 第1学年
- (3) **内容** ネイパル厚岸の職員の指導によるグループエンカウンターおよび学年団教諭の指導による各種レクリエーションを実施した。
- (4) **成果** 入学直後の不安感を解消するとともに、コミュニケーションスキルの向上につながった。



3 ピアサポート

- (1) **ねらい** 生徒をピアサポーターとして養成し、生徒同士での相談活動の充実と、コミュニケーション能力の向上を目指す。
- (2) **対象** 希望生徒
- (3) **内容** 月1回、放課後にピアサポートエクササイズを1～2種類実施する。
- (4) **成果** ピアサポートの経験を積んだことで、学級活動や学校行事等におけるコミュニケーションスキルの向上につながった。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・〔中途退学者数〕 H25：5名 → H26：6名 → H27：5名
- ・〔不登校生徒数〕 H25：8名 → H26：3名 → H27：6名
- ・依然として中途退学者及び不登校生徒が一定数いる。

イ その他の指標による評価

- ・保健室相談者数 H25：328名 → H26：279名 → H27：89名
- ・生徒同士の相談活動を充実させることで、トラブルが解消される場面が増えた。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・第1学年男子の一部で「自律」「称赞」「配慮」が低く、自己中心的な傾向が見られる。
- ・第1学年女子では「緊張」「拒否」が低く、人間関係づくりに不安を感じている。

エ 生徒の変容した姿

- ・コミュニケーションスキルの向上とともに、ボランティア等への積極的な参加など、他者との関わりに対する肯定的な姿勢が見られる。
- ・生徒会執行部、ボランティア局の生徒の人間的な成長がみられ、そのことが生徒全体に好影響を与えている。

2 課題

- ・人間関係のトラブルにより不登校や別室登校、進路変更となる生徒が一定数いる。
- ・「ほっと」とQ-Uテストのより効果的な活用。

3 次年度に向けて

- ・現在のピアサポート活動をさらに充実させ、生徒同士での問題解決の場面を増やす。
- ・教職員間の情報共有と研修の実施により、校内体制のより一層の充実を図る。

北海道標茶高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 213名

1 取組の特徴

- (1) スクールカウンセラーと連携した個別の生徒の困り感への対応。
- (2) ピア・サポート活動や異年齢(校種)交流活動による、生徒のコミュニケーションスキルや自己肯定感の向上と良好な人間関係の構築。
- (3) 外部講師を活用した校内研修による、教員の教育相談活動に対する理解促進。
- (4) 「ほっと」や「Q-U」の活用による、きめ細かな生徒理解と生徒対応。

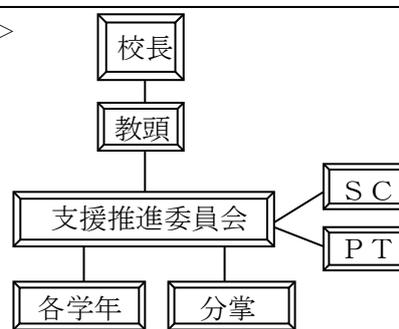
これらの取組を通して予防的・開発的教育相談を充実させ、不登校やいじめの未然防止を図る。

2 取組のねらい

本校は、生活面や学習面で問題を抱えた生徒が多く、入学後に人間関係等でトラブルになり、不登校や別室登校を余儀なくされる場合がある。

こうした課題を踏まえ、本事業を活用し、スクールカウンセラーの援助や指導を受け、連携して自己肯定感を高める取組を通して、コミュニケーションスキルの向上を目指す。

<組織図>



3 取組の経過

4月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報収集と全職員による生徒の情報交換・共有
- ・宿泊研修時における仲間づくり支援(第1学年)

5月

- ・「ほっと」「Q-U」の実施(全学年)
- ・教育相談週間(全学年)

8月

- ・「ほっと」「Q-U」の実施(全学年)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

9月

- ・教育相談週間(全学年)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

- ・外部講師による生徒理解のための校内研修(「ほっと」の有効活用について)

11月

- ・スクールカウンセラーによる生徒理解のための校内研修(ピア・サポート理解について)

2月

- ・「ほっと」「Q-U」の実施(全学年)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

3月

- ・教育相談週間(全学年)

通年

- ・ピア・サポートトレーニング(全7回)

4 取組の内容

1 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング

- (1) **ねらい** 生徒の不安や悩み、困り感を解消し安心して学校生活を送れるよう支援する。
- (2) **対象** 希望生徒及び指定生徒
- (3) **内容**
 - ・生徒へのカウンセリング及び助言
 - ・生徒へのカウンセリングの結果に関わる教員への助言
- (4) **成果** 生徒はSCに悩みを聞いてもらうことを通して自己理解を深めることができた。また、教員は、生徒理解を深めるとともに、課題に対しての支援方法や対応策について助言を受けることができた。

4 取組の内容

2 ピア・サポート活動

- (1) **ねらい** 様々な支援スキル演習を通して、互いに思いやる気持ちを持ち、それを実践する雰囲気を作りだし、豊かな人間関係を構築できるようにする。
- (2) **対象** 希望生徒（約16名）
- (3) **内容** SCの遊佐賢子氏の協力のもと、放課後、ピア・サポートトレーニングを実施。
- (4) **成果** 生徒の振り返りシートから、「何度かこの活動に参加し、改めてピア・サポートは大切だし素敵な活動と思えるようになった。困っている人などに優しく接し仲良く話ができるようになった。」「ピア・サポート活動は楽しく優しい気持ちになれる活動です。」などの感想があり、活動を通して相互理解を更に深めることができた。
- また、ゲーム形式での活動を多く取り入れることにより、打ち解けた雰囲気を作り出し、生徒集団における感情表現の抵抗感を緩和することで、円滑な人間関係の構築を図ることができた。



3 外部講師による校内研修会

- (1) **ねらい** 生徒のコミュニケーション力や自己有用感を高め、人間関係を円滑に築ける生徒集団を作るため、ピア・サポートを通じた生徒理解の方法や「ほっと」の活用について理解を深める。
- (2) **対象** 全教職員
- (3) **内容** ・北海道教育庁学校教育局参事生徒指導・学校安全グループ主査 岡本浩一氏による、子ども理解支援ツール「ほっと」の見方と分析、有効活用についての研修。
・SC佐々木啓子氏による、ピア・サポートの理解と演習・手法についての研修。
- (4) **成果** ・「ほっと」「ピア・サポート」について理解が深まるとともに、生徒のコミュニケーション能力の向上を図るための効果的な活用の手立てを知ることができた。
・「ほっと」「ピアサポート」を活用して、生徒に効果的な面談を実施することができた。



4 教育相談週間

- (1) **ねらい** ・生徒の面談を通し早期の実態把握を行う。
・生徒が悩みを気軽に話し、ストレス等を和らげ、心のゆとりを持てるような環境をつくる。
- (2) **対象** 全学年
- (3) **内容** 第1期・・・担任と副担任が中心となり学年付教員も協力して全生徒を面談
第2期・・・学年の枠を超え、生徒が先生を指名する形態で全生徒が面談
第3期・・・学年の枠を超え、生徒が先生を指名する形態で面談（希望制）
「ほっと」「Q-U」検査結果の活用
- (4) **成果** ・全生徒を面談することで生徒理解が深まった。
・「ほっと」や「Q-U」を事前に実施することで、生徒の背景や現状、コミュニケーションの傾向や課題等を把握した上で面談を進めることができた。

5 次年度に向けて

(1) 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・本事業を推進することにより、中途退学者数が減少した。
H26：8人 H27：2名

イ その他の指標による評価

- ・ボランティア活動の参加者が昨年度より上昇した。地域の方から感謝されることで、生徒は充実感や達成感を得ることができた。
- ・保健室を利用する生徒が上昇したが、このことは相談や自己開示する援助要請力が上昇したためと考えられる。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・13要素のうち「礼儀」「遵守」の項目が他の項目と比較して高く、「表明」「緊張」「拒否」の項目が低い。年度当初は、緊張しながら自分の居場所を探して、周囲に気遣いながら自分の意見をなかなか主張できない傾向にあったが、経時比較していくと、全体を通してどの要素・因子も向上している。様々な活動や人との関わりを通して徐々にではあるが、社会的コミュニケーションスキルが身に付いていることが伺える。ただ、学年やクラスによっては、まだ「表明」や「拒否」の偏差値が低いところもあるため、今後ピア・サポート活動やボランティア活動等を通じて、自分をうまく表現できる力を身に付けさせる必要がある。

エ 生徒の変容した姿

- ・ピア・サポートトレーニングの実施によって、良好な人間関係の構築を図ることができた。集団の中で自分の意見を言うことが苦手な生徒も、トレーニングを通じて表明・発表の力がつき自己肯定感向上につながり、友人の中でコミュニケーションを上手にとれるようになってきている。また、授業の中でも、グループワークやプレゼンテーションを通して友達と意見交換したり発表したりすることに慣れてきた様子が伺えた。
- ・地域連携や異校種と連携した行事やボランティア活動において、身に付けたコミュニケーションスキルを活かし、他者と積極的に関わる生徒が見られるようになった。

(2) 課題

- ・「ほっと」の結果について教員間で共有する体制が必要である。分析結果から具体的な取組を意図的に取り入れることによって生徒がどう変容したか更に分析を深める必要がある。教科・科目・コミュニケーションスキルトレーニングの取組との連携を十分に図る必要がある。
- ・ピア・サポート活動を継続・発展的な取組にしていくため計画的に実施する必要がある。
- ・スクールカウンセラーの確保や日程調整が非常に難しい上、来校日数に制限があるため活用しきれない場合があった。

(3) 次年度に向けて

- ・「ほっと」を通して生徒のコミュニケーションスキルの把握と、小中高を見通したスキルアップの流れを意識する必要がある。
- ・異校種間連携事業において、高校生による小学校への出前授業や特別支援学校との交流に参加している生徒等を、「ほっと」を用いることで、コミュニケーション能力の内容や発達の状況を把握・結果を共有し、課題のある生徒への意図的な働きかけを系統的に行う。
- ・ピア・サポート活動の更なる充実を図る。
- ・人間関係をうまく構築できず不登校や別室登校をする生徒が一定数いることから、一層の生徒理解と教職員間による情報共有が必要である。そのためには、スクールカウンセラーや外部講師の支援による効果が非常に大きく、次年度以降もスクールカウンセラーの派遣を強く希望する。本事業が決定した際には早い段階でスクールカウンセラーの確保に努めたい。